

1940年代以降のハイデガーの思惟、とりわけ現代技術の本質を「総かり立て体制 (Ge-stell)」と呼ぶその技術論に、ハイデガー自身とも親交のあった E. ユンガーの 1930年代の『総動員』(1930年)、あるいは『労働者』(1932年)の思想が強く影響を及ぼしているということは比較的知られたことと言える。その中で特に注目すべきは、そこでのハイデガーの人間存在把握である。ハイデガーが『技術への問い』(1953年)の中で総かり立て体制の下にある人間存在を「人的資源(Menschenmaterial)」と呼んだことはよく知られているが、さらにハイデガーはそのような人間存在を「代替可能性」という概念によって捉えていた。これは、ユンガーが「労働者」という形態において捉えた近代以降の人間存在の類型的なあり方を、ハイデガーが徴用された物資の総体の中での断片となった人間存在を代替可能性という概念によって際立たせたものであると解釈できるであろう。そこで本発表では、ハイデガーの技術論の原型とも考えられるユンガーの労働者としての人間存在のあり方を振り返るとともに、そこから展開されてきたハイデガーの技術論との異同を明らかにした上で、現代の我々自身のあり方を検討するための礎とすることを目指す。

1930年代当時、ユンガーは自らの第一次世界大戦での従軍経験を踏まえつつ、物量戦へと転化していった戦争時の様態が大戦後の平時にも持ち込まれているあり方を「総動員」と名づけていた。そして、そのようにして動員される人間存在のあり方を「労働者」という形態(Gestalt)として捉えていた。一方、ハイデガーは『技術への問い』のもととなった1949年のプレーメン連続講演において、総かり立て体制の中での人間存在を現代技術の巨大な円環運動の中で徴用して立てられた物資としての用象(Bestand)として、あたかも機械の部品であるかのように特徴づけ、その根本性格を「同形画一的」なものの「代替可能性」の下に捉えていた。言うまでもなく、代替可能性の下に人間存在を捉えるあり方としては、『存在と時間』において規定された世人(das Man)のあり方が想起されるが、ここで言われている技術の本質に支配された人間存在のあり方は、ユンガーの労働者の形態が一つの「類型(der Typus)」として把握されていたことを受けて、より深化せしめられた意義において規定されていると考えることができる。

以上のようなハイデガーとユンガーの人間存在理解は、現代の我々自身のあり方と重ねて考えられるべきであろう。そうであるとすれば、ここで我々に課されているのはこのような技術の時代における我々自身のあるべき存在を問うことにほかならない。その際、まず了解されなければならないことは、現代技術の由来である形而上学のニヒリズムのあり方へのハイデガーとユンガーの立場の違いである。存在の歴史の視点から技術の本質を思惟するハイデガーは、ユンガーの思想を取り入れつつ、ユンガーの思想が（ニーチェと同様に）形而上学の圏域に留まっていることを批判している。そこから、両者の現代技術へのスタンスと将来への展望も変化せざるをえない。ハイデガーは現代技術の本質の内に危険を見出すが、ただ悲観的にそれを捉えるのみではなく、ヘルダーリンの詩を引きながら、そうした危険の内に救うものもまた育つと語っている。こうしたハイデガーの思惟が現代の我々にとって意義あるものとして聴取されるためには、いかなる人間存在のあり方が求められるかについて考察したい。